投稿

日本で初めて開催された「世界ラリー選手権（WRC）」に参加して

札幌医科大学附属病院
高度救命救急センター
浅井康文
森　和久
伊藤　靖

はじめに

「ラリー」という自動車競技には、国内の初級者向けのラリーから世界最高峰のWRC（World Rally Championship＝世界ラリー選手権）まで様々な形態があるが、一般的にはまだ日本では馴染みのないモータースポーツ競技である。WRCはFIA（国際自動車連盟）およびJAF（日本自動車連盟）が公認する世界大会であり、日本国内では初めて９月３～５日、帯広市を中心とする十勝地方で開催された（ラリージャパン）。この大会はF１（フォーミュラー１）と並ぶモータースポーツのイベントの頂点であり、それに相応して医療を含む安全性の確保についても世界的な基準を満たすことが求められる。筆者は東邦大学医学部脳神経外科の上田守三教授のご推薦で、WRCの医療団の顧問として、本大会に医局員10名と参加したので、報告する。

図１：コマンドセンターではヘリコプターより走行車の様子が映し出される

図２：スクリーンに映し出された事故車

WRC開催までの道程

2001年、初めて北海道で国際格式のラリー大会が開かれ、2002年からアジア・パシフィック・ラリー選手権に昇格し、今年は最高峰のWRCに到達した。WRCは今季、世界で16戦が行われ、ラリージャパンはその第11戦にあたる。

この間、今回医師団長を務められた野田　健先生をはじめ、関係者のWRC開催に向けての長年のご努力は大変なものであったとお聞きした。

医療活動

ラリーという競技の特性から、サーキットレースのように１カ所に医療施設を準備するだけでは競技エリアをカバーすることができないためFIA規則に従い各コースの多くの要所にFIV（first intervention vehicle）と共に医師、看護師を配置し、初期治療の医療機材、レスキュー機材を用意

図３：治療の指示を出す、野田　健医師団長

することに加え、医療ヘリコプター等を使用して医療施設までの搬送の準備をした。医師の総数は16名で、後方病院は帯広厚生病院であった。

WRCでは、医療に関しては歴史があり、マニュアルにそって医療行為を行うよう定められており、これにはヘリコプターによる搬送も当然含まれている。重症例はヘリコプターにより、帯広厚生病院の救命救急センター（一瀬廣道センター長）に搬送することになっていた。医師団顧問は浅井が勤め、医師団長は野田　健先生、副医師団長は教室の森講師が勤め、教室からも総勢10名が参加した。

オフィシャルが競技中に事故に遭遇した場合に従う手順は、1.人命救助を第一優先に考え、慌てず冷静に対応すること、2.二次的な事故が発生しないよう十分に配慮すること、3.現場責任者（ステージコマンダー）に迅速に報告すること、4.現場責任者はコマンドセンターに正確な状況を緊急連絡すること、5.現場責任者の指示に従いレスキュー・消火業務を行うこと、6.負傷者の救出・救助については、ドクターの指示に従うこと、7.医療ヘリ・救急車等での救急病院への搬送については、セーフティープランに従いドクター同行で行うことなどが決められている。AED（自動体外式除細動器）も7ヵ所に配置された。浅井らはコマンドセンターに待機し（図1）、ヘリコプターの追跡で映し出される事故現場（図2）と連絡をとり、治療や搬送の指示を出した（図3）。

今回、帯広厚生病院救命救急センターに搬送されたドライバーとコドライバーは6名で、うち2名がドクターヘリにて搬送され、血気胸と外傷性くも膜下出血で短期入院したが、軽快退院している。従来はラリー車の事故で病院に搬送されることは稀とのことであった。

今回は沖縄サミットで有名となった、モービルICU車の参加を予定したが、台風のため到着出来なかった。

経済効果

このWRCが十勝地方にもたらした経済効果は著しく、旅行代理店のツアー旅行、キャンプ場・宿泊施設は満員で、コンビニや食料品店などは肉の大量購入があり、またチーズなどの十勝産品などが売れていた。また帯広市内の飲食店は人があふれていた。陸別などはWRCを町おこしの切り札とまで位置付けていた。

今回の成功であと2年間は引き続き北海道でWRCが開催されるとのことである。WRCの開催が毎年十勝で開催されれば、世界中からの観客の来道が期待される。

WRC第11戦

世界最高峰のモータースポーツイベントで日本初開催のWRC第11戦、併催して行われたアジア・パシフィック・ラリー選手権第4戦ラリー・ジャパン2004は、9月3日午前5時半、帯広・北愛国のサービスパークを1番車がスタートし、3日間の戦いが始まった（図4）。競技には世界18カ国から90台が出場し、陸別、幕別、足寄、新得の4町で実地された。総走行距離1,975.55Km、そのうちタイムアタックを実地しているSS（スペシャルステージ）は27カ所で計387.50Kmであった。前夜に帯広市内で行われたセレモニースタートは52,000人の熱狂した観客で埋まった。札内

図4：ラリースタート地点

図5：札内スーパースペシャルステージ（SSS）

スーパーステージでは、2台併走の激走が見られ、ジャンプ台やコーナーの走りの大歓声が巻き起こっていた。コースを取り囲むスタンド席には収容定員2万人に達するほどの大観客が詰め掛けた。幕別町の札内川河川敷特設ステージでは国内初の2台併走式のスーパースペシャルステージ（SSS）が、3,4日は夜、最終日の5日には昼間に行われた（図5、6）。残念であったのは一連の不祥事で三菱の車が少ないことであった。競技は9月5日の帯広・北愛国サービスパークでの表彰で最後を飾った。今回は地元日本の企業であるスバルに乗ったペター・ソルベルク（スバルワークス）が優勝し、おおいに盛り上がった（図7）

考案

今回のWRCでは、レース関係者の医療体制は構築されたが、観客は通常の救急体制の中におかれた。この中でMass gatheringについては、配慮されていなかった[1,2,3]。Mass gatheringとは「共通した目的で1,000人以上の人員が、同一時間同一地域に集合するもの」と定義される。国内ではスポーツイベント、ヨサコイソーランのような祭り、催し物、音楽コンサート、花火大会やWRCのようなモータースポーツなど様々なMass gatheringが行われているが、安全面から集団の行動は管理される必要があるとされている。近年においてMass gatheringの規模は大きくなる傾向があり、それに伴い救急患者や集団災害が増加する可能性が高まっている。またWRCなどの国際的イベントにおけるMass gatheringでは、通常の災害以外にもテロリズムなどに起因する特殊災害に対する準備も考慮する必要があると提言したい。

おわりに

世界最高峰のモータースポーツイベントWRC（世界ラリー選手権）が来年9月30日から3日間、日本で再び開催されることが決まった。日本は第13戦に組み込まれた。来年のWRC日本開催の場所は十勝になるかどうかは未定であるが、今年の日本初開催のラリー・ジャパンは観客動員約21万と経済波及効果も絶大だったことから、地元関係者は十勝での継続開催を強く要望している。

文献

1．丹野克俊、浅井康文他：YOSAKOI　ソーラン祭り会場テロにおける救急医療対応、日本集団災害医学会誌、6：137－140，2001
2．勝見　敦、浅井康文他：アンケート調査による2002FIFAワールドカップ大会における集団災害医療体制構築の活動に対する評価、日本集団災害医学誌、9：45－51，2004
3．浅井康文、丹野克俊：2002年FIFAワールドカップ札幌開催に向けての救急医としての展望、北海道医報、第972号、26－29，2001

図6：札内スーパーステージ内で待機する医師団

図7：優勝したペター・ソルベルク（スバルワークス）